

明治 40 年代の名古屋の洋楽受容 — 『名古屋新聞』の奏楽記事を中心に—

The Diffusion of Western Music in the Forties of the Meiji Era Nagoya : On the Basis of the News Accounts of Musical Performance in the *Nagoya-Shinbun*

小 沢 優 子

OZAWA Yuko

It has been pointed that Western music began to be spread in Nagoya late in the Meiji era. But little is known about the actual state of Western Music in Meiji Nagoya. In this paper, I clarify the process of its diffusion in the forties of the Meiji era, basing on the news accounts of musical performance in the *Nagoya-Shinbun* which was one of the leading newspaper at that time Nagoya.

By surveying the news items, various kinds of musical performance in public are found : the concerts by foreign musicians and prominent Japanese musicians, the concerts which has Japanese and European elements, the concerts at the competitive exhibition in 1910, the variety show, and musical entertainment at the meetings . We can see from them that, while traditional Japanese music enjoyed general popularity, Western music was gradually diffused in Meiji Nagoya.

キーワード：明治 40 年代 the forties of the Meiji era 名古屋 Nagoya

洋楽 Western music 『名古屋新聞』 the *Nagoya-Shinbun*

1. 序

邦楽の嗜好が強かった名古屋では西洋音楽の普及が首都圏や関西に比べると遅く、本格的な導入の段階へと至るのは明治時代の末頃であると言われている（『新修名古屋市史』第五巻：838）。だが、今までに明治、大正期の名古屋の洋楽受容の実状やプロセスが体系的な研究によって明らかにされているわけではない¹。とくに明治時代に関する資料調査はほとんどなされておらず、明治 23 年 9 月から明治 31 年 2 月まで刊行された日本最初の音楽雑誌である『音楽雑誌』で記述されている〈愛知音楽会〉〈名古屋音楽連合会〉による明清楽を含んだ和洋混合の演奏会や〈金城軍楽会〉の活動（小

沢 2011: 18-20) についても、新聞等の他資料を通した確認が必要である。洋楽受容の黎明期であるこの明治 20 年代、30 年代へのアプローチは次の機会に託すこととして、本論文ではまず、洋楽が徐々に浸透するようになった明治 40 年代を扱う。日露戦争後の経済発展の中、都市化が進められていた当時の名古屋における洋楽の演奏状況を、『新愛知』と並ぶ主要新聞である『名古屋新聞』の音楽記事を中心にしながら提示し²、名古屋の洋楽受容研究の一つの端緒としたい。

2. 『名古屋新聞』の音楽記事

『名古屋新聞』は、明治 39 年 11 月、『中京新報』を前身にして創刊された。当初は名古屋市と尾張郡を主力とし、次いで三河、岐阜、三重へと及んで次第に拡張させ（『名古屋新聞社史』: 15）、明治 21 年 5 月に創刊され圧倒的な部数を誇る『新愛知』とともに名古屋の政治、経済、文化の報道に大きな役割をはたしている。太平洋戦争下の昭和 17 年、政府による新聞統合の波を受け、両紙が合併して『中部日本新聞』となったことは周知の通りである（昭和 40 年に『中日新聞』と改題）。

明治 39 年 11 月から明治天皇が崩御する明治 45 年 7 月までの間、『名古屋新聞』に掲載されている音楽記事の多くは邦楽や俗楽関連のものである（筑前琵琶、薩摩琵琶、能楽、謡、長唄、浄瑠璃、浪花節、尺八の大会や温習会や名人会、また、会や組織、奏者について）。創刊まもない明治 40 年 6 月から 8 月にかけて、次のような呼びかけにより歌舞音曲の 12 人の名手を読者投票で選ぶ企画が打ち出されているのも芸所名古屋を改めて認識させる事柄である。

當地方は歌舞音曲の伎に就いて東京をも京都大阪をも凌駕し遊藝の中心点たらしめるの觀あり因て我が社は藝道奨勵の目的を以て弘く天下に號し舞踏にまれ長唄にまれ常磐津、清元、義太夫にまれ其伎神に入り一藝を代表するに足るべき十二名手を投票に依り募集せんとす [明治 40 年 6 月 26 日] [] 内は『名古屋新聞』の日付

一方で、洋楽の記事はまだ少ないものの、演奏会の告知や演奏会後の感想、音楽組織や団体、劇場や施設の説明、音楽家の紹介、楽器広告、行事や催し物における奏楽の報告などから、洋楽がさまざまな形で少しずつ存在感を見せ始めていく有様が把握される。市内の学校の音楽教師によって設立された名古屋音楽講習会 [明治 41 年 3 月 19 日]、第三師団衛戍病院の病兵のための娯楽室にオルガンや数種の楽器が備え付けられていること [明治 43 年 4 月 16 日] など、個々それぞれ興味をそそられるものがいくつもあるが、以下、演奏に関する記事を拾い上げ、明治から大正にかけて刊行された音楽雑誌である『音楽世界』（明治 40 年 1 月から大正 4 年 12 月まで）や『音楽界』（明治 41 年 1 月から大正 12 年 12 月まで）、さらに他新聞の関連記事で補いながら、名古屋でどのような洋楽演奏がなされていたのかを見ていくこととする。

3. 明治 40 年、41 年、42 年の演奏会

(1) 明治 40 年 3 月 1 日のマーケンスとハントの演奏会 御園座³ [明治 40 年 2 月 25 日、26 日、27 日、3 月 1 日、3 日、14 日]

明治 40 年 2 月 21 日の東片端の自由教会での「モザルト紀年演奏会」 [明治 40 年 2 月 21 日]⁴ か

ら約1週間後の3月1日、オランダのヴァイオリニスト、ヘンリーエット・マーケンスとイギリスのピアニスト、ホナビア・ハントの演奏会がスミスの独唱も交えて行われている⁵。両嬢の演奏会は1月22日と24日に東京の神田青年会館で（『音楽世界』第1巻第2号）、2月4日に帝国ホテルで（『日本の洋楽百年史』: 158）、2月16日には大阪の中之島公会堂（『音楽世界』第1巻第3号）で催されており、東京、関西を経た上での名古屋公演である。外来音楽家による演奏会は名古屋では珍しく、『名古屋新聞』では6回に渡って報じられている。それらをまとめると次のようになる。

2月28日に神戸で演奏会が持たれた後、2人とも夜行列車で来名した。前年の秋、宮内省の楽師が来て耳新しいオーケストラを聴かせてからまだ半年であるのに⁶、このような大音楽家を迎えるのは喜ばしいことである。慈善事業に寄付するための演奏会で、招聘したのは名古屋婦人会。招聘に至るまでは師範学校の安田（おそらく愛知県第一師範学校教師の安田俊高⁷）と中京音楽院の村岡が尽力した。ピアノは愛知県立高等女学校のグランドピアノを借りた。

曲目はシューマンの《ファンタジースツウス》やメンデルスゾーンの《コムチェルト》、リストのピアノ独奏曲、マーケンス自作の《ハビロンクス》などすべて西洋の楽曲である。当日は、三重県や岐阜県からの来会者もあり、2千余名が集まる立錫の余地のない盛況ぶりだった。もっとも、演奏会後の某外国人婦人の談によると、会場の音響が悪かったこと、最後の君が代の合唱で帽子をかぶり頓狂な声を出して合唱を打ち壊そうとした聴衆がいたことなど、残念な点もあった。翌日、2人は鈴木ヴァイオリン工場を見学してから京都に向かい、夜には同地の演奏会に出演した⁸。演奏会の収入661円55銭、総支出426円52銭、残金235円3銭、という決算報告が出されている。

(2) 明治41年1月30日と11月23日の三田音楽院の演奏会 萬松寺・中央教会

名古屋在住の音楽家によって団体が組織され定期的に演奏会が催されていたことを伝えているのが『音楽界』である。

目下団体としては三田音楽院、秋洲管絃樂團、ヴァイオリン女樂會、名古屋音楽俱樂部…等で此中最も勢力を占めて居るのは三田音楽院で生徒は約百名餘り在る、院長は三田正美氏で氏は海軍々樂隊出身である…（『音楽界』第1巻第3号「名古屋の音楽界」）

このように百名もの生徒を持つ三田音楽院所属の秋洲管絃樂團第7回例会が、明治41年1月30日に名古屋市裏門前町萬松寺で行われ、雨天にもかかわらず6百余名の聴衆を集めている。《長唄鶴龜》《箏曲千鳥》《長唄越後獅子》《鶴の巣ごもり》などをヴァイオリンやヴァイオリンと琴の合奏で奏する和洋折衷の演奏会であるが、ヴァイオリンの合奏による《Arienus dem Barbier Von Seville》や、三田音楽院奏楽隊による《愛国的行進曲》《大日本帝国艦隊行進曲》もプログラムに含まれている（『音楽界』第1巻第3号「秋洲管絃樂團音樂會」）。

また、11月23日、久屋町の中央教会での第10回演奏会では、ヴァイオリン独奏の《勤進帳》《残月》《ホトトギス》のほか、ハイドンのセレナード、メヌエット、また、作曲者不明のワルツ、ポルカ、行進曲、バルカローレといった西洋の曲がヴァイオリンの合奏やヴァイオリン、オルガン、ハーモニカの合奏で演奏されている（『音楽界』第2巻第1号「三田音樂會」）。

(3) 明治41年4月25日の東京音楽学校教官による演奏会 御園座[明治41年4月20日、22日、23日、

24日、25日、27日]

ピアノの幸田延、声楽の藤井環（後の三浦環）、ヴァイオリンのアウグスト・ユンケル、ピアノのヘルマン・ハイドリヒ、チェロのハインリヒ・ヴェルクマイスターら東京音楽学校の教授、講師による演奏会である。「何しろ斯道の大家の揃ひ切りなので田舎では左様に度々は開かれぬ大音楽會」（『音楽界』第1巻第6号）として注目され、『名古屋新聞』では次の8件で扱われている。

①「大洋樂會の開催」[4月20日] 演奏会の告知記事である。名古屋清話會の招聘により、入場券は1円50銭、1円、50銭の3種類。券の斡旋発売は名古屋婦人會の會員がおこなう。曲目には、四部絃樂によるハイドンの《ヴァリエーションズ》や《セレナード》、シューマンの《トロイメライ》、チェロ独奏によるドヴォルジャークの《アンダンテ（セロコンセルト抜萃）》など西洋の曲が並ぶ。

②「音楽の趣味」[4月22日] 洋樂の趣味を論じる長いエッセイだが、最後にこの演奏会について、「座乍らにして大家名手の神技に觸れすくなくとも洋樂の何たるを眼にし耳にし得るは、中京市民の容易に得難き好機たるべし、此の如き機會の屢々來るあり、而して之に會するの市民漸く多くしてこそ初めて中京として誇り得るの價值を生ずべき歟」と、大音楽會開催にあたっての名古屋の意気込みを語っている。

③「幸田延女史」[4月23日] 幸田延を写真付きで紹介。

④「アウグスト、ユンカー氏」[4月24日] ユンケルを写真付きで紹介。

⑤「音楽界彙報」[4月24日] 幸田延が24日に來名し、25日に市内各女學校を視察すること、徳川義禮侯令嬢のヴァイオリン教師なので侯爵邸を訪問すること等が記されている。

⑥「マイステル氏」[4月25日] ヲルクマイスターを写真付きで紹介。

⑦「幸田女史と語る」[4月25日] 幸田が愛知県立高等女學校を訪れた時の様子を伝えている。校長室で幸田は記者にこのように語っている。

…御地方は昔から俗樂の盛んに行はれている處で俗樂を弄ばぬものがないといふ位俗樂の勢力の非常なことは豫て承っていましたが今度参つて見まして噂よりも以上なのに實は驚いたやうな次第で御座います。恚ういふ土地へ洋樂趣味を注入するとは大に必要であらうと思はれます。併し必要と同時に非常に困難であらうと察せられます。御地方からは餘り洋樂方面にこれといふ方は無いやうですが一人鳥居つな子という人が昨年音樂學校を卒業されて目下同校の助教授をされています。…

俗樂が盛んなので洋樂の普及は難しいだろう、という東京の音樂家の名古屋觀がうかがえる興味深い発言である。なお、幸田が名前を挙げている鳥居つな子（鳥居つな）は明治19年生まれ。明治39年から昭和19年まで東京音樂學校に授業補助、講師、助教授、教授として在職し、ヴァイオリンと管絃樂を担当している（『東京芸術大学百年史東京音樂學校篇』第二巻：1567）。

⑧「音樂會を見るの記」[4月27日] 演奏の印象が綴られている他、「一二三等席人を以て埋ずむ。一等席は上ハイカラ多く、二等席は中カラー、三等席には蠻カラー多し、斡旋の爲めに臨時備はれたる夫人令嬢様等頻りに廊下花道を駆け廻る」と客席や会場係の様子も伝えている。

『音楽世界』第2巻第8号で「よく嚴肅に肩を凝して聞き居たる名古屋には感服した」と述べられて

いるように、当時最高レベルにあったこの演奏会を名古屋の聴衆は真面目に聴いていた。

(4)明治42年1月30日の「伊國震災救恤金募集音楽會」 御園座[明治42年1月28日、29日、30日、2月1日]

イタリアで起こった震災の義援金募集のための演奏会である。新聞倶楽部の主催による。名古屋では初登場となる東京の演奏家たち—ヴァイオリンの東儀哲三郎、山井基清、ヴィオラの吉澤重夫、チェロの三宅延齡、ピアノの本居長世、独唱の三善和氣—が出演している。曲目は弦楽四部合奏によるハイドンの曲、ベートーヴェンのピアノ独奏曲《ソナタパストラーレ》、弦楽四部合奏やヴァイオリン、ヴィオラ、ピアノの三部合奏によるモーツァルトの曲などである。入場料は1等1円、2等70銭、3等50銭、学生35銭。28日の段階で学生券の売れ行きは良好でほとんど売り切れだった。淑徳女学校や名古屋裁縫女学校、会社や銀行など団体での購入も多かったが、義援金の募集はすでにほかのところでも行われていたので、当日の入場者は少なく4百名程度と振るわなかった。

(5) 明治42年の和洋混合演奏会

明治42年には2つの和洋混合演奏会についても詳しく報告されている。

a. 9月28日の和洋合奏音楽会 御園座 [明治42年9月24日、27日、28日]

東京音楽学校の出身で和洋折衷の音楽活動で知られる北村季晴⁹を迎えて催され、《鶴龜》《吾妻八景》《老松》《秋の色草》がピアノとヴァイオリンで合奏されたほか、《賤機帯》がヴァイオリン、ピアノ、唄、三味線、笛、太鼓、舞踏で披露されている。『音楽界』第2巻第12号によると、「俗樂の盛んなる當市の事として非常なる好評を以て迎へられ近來稀れなる盛會なりき」であったという。

b. 11月20日の慈善音楽会 御園座 [明治42年11月19日、20日、22日、25日]

愛育育児院のための慈善演奏会。東京から招いたヴァイオリンの藤井春風のほかは愛絃界の会員や、尺八の内田紫山ら名古屋市在住者のみによる。「名古屋土着の人士のみにて演奏し意外の好成績を得たるは確に中京音楽界の前途に一曙光を與へたるものと云ふべく今當夜の演奏に就て素人評を試みんに…」[11月25日]と演奏会の短評が載せられているのも人気と好評の証であろう。

曲目は『音楽界』第2巻第12号に詳しい。ヴァイオリンとピアノによるロッシーニの《バルビール、セヴィル》、ヴァイオリンと箏の《千鳥の曲》、ヴァイオリン、ピアノ、三絃、唄で《吾妻八景》《鶴龜》、内田紫山の尺八《鶴巢籠》などである。

4. 明治43年

(1) 第10回関西府県連合共進会

明治40年代は名古屋が都市としての規模を備えていく時期にあたる。明治22年に市制が施行された当初はわずか13.34km²の面積だったが、近隣町村を合併して次第に拡大され、明治40年には愛知県熱田町が、明治42年には愛知県千種町や御器所村の一部が市域に編入され、34.11km²の面積となった(『新修名古屋市史』第五巻:396-399)。同時に人口も増加し、明治22年に15万7496人だったのが、明治40年には35万4733人、明治41年には37万4146人、明治42年には38万7761人、明治43年には40万5648人となっている(『総合名古屋市年表明治編』)。このように名古屋が拡大

していく最中、御器所村の鶴舞の地（鶴舞公園）を会場にして開催されたのが、名古屋開府三百年記念の年にあたる明治 43 年の第 10 回関西府県連合共進会である。

3 府 28 県の参加、出品点数 13 万 1235 点、3 月 16 日から 6 月 13 日までの 90 日に及ぶ会期、260 万人の来場者、というこの共進会は内国博覧会と言ってもよいもので、「名古屋市が新しい発展をつかんだ事業」とも位置付けられている（『新修名古屋市史』第六巻、88-92）¹⁰。能楽堂や演舞場などが設けられた会場では会期中さまざまな余興や催しが行われ、中でも開府三百年記念として建設された奏楽堂¹¹での吹奏楽は、公共の開かれた場での連続的な洋楽演奏として注目すべきである。

(2) 共進会の奏楽

共進会の奏楽のために加藤重三郎名古屋市長を会長に「名古屋音楽会」が組織されたのは、前年の明治 42 年 11 月 25 日である。

名古屋音楽会規則協定の為二十五日午後一時より安藤清次郎、長谷川糾七、島本権左衛門、佐野敏三郎、野村朗、鈴木政吉、原田勘七郎の諸氏市役所に會合種々協議の結果會長に加藤市長を推薦し副會長、幹事、會計、樂長、同次長等は會長より指名する事と為りたるが陸海軍樂隊退職者及び經驗者を集め不日實行に着手する由〔明治 42 年 11 月 26 日〕
会の設立と奏楽の樂手については次に詳しく語られている。

…元來我が名古屋市民に於ける經驗（聴く方の側から云ふ經驗）と云へば、學校で行る唱歌、廣告屋の我流樂隊、活動寫眞の囃し方位なもので、其他東京から偶々出張演奏するコンサートであるが、之とて多くは弾條樂器を主にして居るから、吹奏樂器を主とする、眞の西洋音樂を耳にする機會が寔に少なかった。……共進會場内の奏樂堂は閉會後鶴舞公園として將來名古屋公園の奏樂堂となり、東京日比谷公園の奏樂堂に倣って、閉會後は毎週一回泰西音樂を演奏して市民の頭に洋樂を注入するといふのであるから、眞乎廣告屋の樂隊が演ると云ふ譯にも行かぬので市内の樂器商鈴木政吉其他二三氏が種々奔走した結果名古屋音樂會なるものを設立し加藤市長を會長として市會議員の某々若手連が加はって略ぼ議決する處があつたさうだ。之等の点からして樂手としても相應に腕のある人を聘して、差當り共進會期中だけでも恥かしくないようにしたいと奔走した結果、嘗て海軍に樂手として職を奉じた事のある人で、現に市内に在住の三田正美、鈴木鶴太郎、横地好比、其他近藤、棚橋、青山外二三名の諸氏に樂手を依頼し、閉會後毎週一回の演奏に關する萬事をも托したさうであるから、諸氏の西洋音樂趣味に乏しい同好者を導くと同時に、三府に亞ぐ中京として、東西大都市に對し恥かしからぬ音樂團を作らんものと、何れも力瘤を入れつつあるさうだ、…〔明治 42 年 12 月 24 日〕

名古屋に眞の西洋音樂を、という氣概のもと、共進会での奏楽のため鈴木政吉等が中心となって名古屋音楽会が設立され、先述の三田音楽院の院長である三田正美を始めとする海軍軍樂隊の樂手經驗者に演奏が委ねられたことがわかる。大阪では明治 21 年に設置された陸軍第四師団軍樂隊とその後に組織されるようになった民間音樂隊の存在が洋樂の普及に大きな役割を果たしていたが（塩津 1993）、名古屋ではそのような動きはなく、洋樂の浸透は進んでいなかった。東京や関西に遅れをとっていた

名古屋の洋楽受容は、共進会を期に一步前進の気運を得たと言えるかもしれない。

奏楽堂は、噴水塔のある広場から正門に入ってすぐ正面に位置する洋式八角形八面解放の建物である（『三府廿八県第十回関西府県聯合共進会場平面俯瞰全図』）。共進会が開会した明治 43 年 3 月 16 日に演舞場と台湾館の間にある竜ヶ池の展望台で奏楽をした名古屋音楽会の楽隊は〔明治 43 年 3 月 17 日〕、その後このモダンな奏楽堂で演奏を始める。奏楽日、楽隊の人数、曲目については開会 2 日後の記事が語っている。

…昨年十二月より練習に着手し今日に至れるものなるが演奏は晝間は連日演奏十曲前後夜間は日曜大祭日に限る 但し特殊の場合は此限りに非ずといふ各曲共にオペラ用の有名なる歌曲にして演奏者十七名（定員は十八名）なり而して今日目若し風無ければトラビアタと云へる歌劇にして目下歐洲に於て最新流行の三幕物悲劇を演奏する由なるが…〔明治 43 年 3 月 18 日〕

この記事の翌日、楽長の三田正美が「トラビアタ」（ヴェルディの《トラヴィアータ》）を指揮する写真が載せられているが〔明治 43 年 3 月 19 日〕、残念ながら不鮮明である¹²。

演奏される曲は折につけ紙面に紹介され、『名古屋新聞』では 38 件のプログラムが認められる。三田正美が作曲した《共進会行進曲》や《名古屋行進曲（名古屋祈念行進曲）》¹³、ワーグナーの《タンホイザー》や《ローエングリン》、グノーの《ファウスト》などのオペラからの抜萃、種々の行進曲、ワルツ、ポルカ、接続曲など、150 曲以上が演奏されている。軍楽隊編曲の《箏曲六段》《三番叟》といった邦楽曲も含まれてはいるものの、ほとんどは西洋の楽曲である。旅順海戦館、天女館などがある共進会場北端の余興街では昼夜客寄せのために楽隊が「プウカドンドンの奏楽」をしていたが（『新愛知』明治 43 年 3 月 28 日）、奏楽堂では腕のある楽手による本格的な洋楽曲が演奏され、共進会を訪れた人々はベンチに腰かけながらその調べに耳を傾けていた〔明治 43 年 3 月 20 日〕。

大正元年に名古屋に設置された陸軍第三師団軍楽隊が鶴舞公園奏楽堂での演奏会を始めるのは大正 4 年からである。それに先立ち、継続的な洋楽演奏の試みが明治 43 年の共進会開催をきっかけに行われ、多くの来場者に普段は聴くことのない洋楽の響きを届けていたのである。

(3) 2つの大音楽会

共進会の開催中、2つの大音楽会についての記事が見られる。

a. 4月22日の東京音楽学校の演奏会 東陽館〔明治43年4月19日、21日、22日〕

東京音楽学校の学友会有志 50 余人が 1 週間の予定で関西各地を旅行し¹⁴、その途中名古屋でも演奏会を行っている。会場は浄瑠璃会や謡会のためにも使われることのある東陽館で、30 銭均一の会費である。杉山長谷夫¹⁵のヴァイオリン独奏でアラードの《ベルスーズ》、舟橋榮吉の独唱でシューベルトの《リンデンバウム》、ピアノ独奏では貫名美名彦によるシュットの《カーナヴァルミニオン》や服部 騨郎次によるシューベルトの《アムプロムプチュ》などが演奏され、「五十人以上の日本語の大合唱は未だ嘗て他の音楽會に於て見ざるところにして獨り音楽學校特有の技とも言ふべく」〔4 月 21 日〕というように名古屋では珍しい大合唱が聴きどころでもあり、小松耕輔作詞、クロイツェル作曲の合唱曲や滝廉太郎の《花》の合唱も歌われている。参加の申込先は、名古屋通信社、中京堂、文星堂、東

門前町の鈴木政吉等である。

b. 5月22日の東京フィルハーモニー会の演奏会 愛知県会議事堂 [明治43年5月17日]

東京フィルハーモニー会は、東洋音楽学校の設立者である鈴木米次郎と東京音楽学校教授のハインリッヒ・ヴェルクマイスターの発起により、マクドナルド英国大使、岩崎小弥太男爵、大隈重信伯爵の保護のもとに設立された演奏会組織である。明治43年4月3日に第1回演奏会が東京音楽学校で持たれ、東京音楽学校の教師であるヴェルクマイスター、ルドルフ・ロイテル、ハンカ・ペツォルト、安藤幸、アウグスト・ユンケル等が出演した（『日本の洋楽百年史』：216-217）。それから7週間後の5月22日に、共進会を機に、名古屋で2回目の演奏会が愛知県会議事堂で催されることが報じられている。午後2時と7時の2回の開催で、4月3日と同じくヴェルクマイスター、ユンケル、ペツォルト、ロイテルらが登場する大音楽会である。だが、東京音楽学校の演奏家たちによる1日2回の公演であるにもかかわらず、5月17日の後は記事が見られず曲目等は不明である¹⁶。

(4) 10月9日、10日の名古屋盲人会慈善演芸会 御園座 [明治43年10月1日、7日、9日、31日]

洋楽演奏会、和洋混合演奏会とは性格が異なるが、演芸会もまた洋楽の香りをいくらかは帯びた催し物である。音曲や落語、手品、剣舞など雑多な内容を持つこの演芸会の人気の高さは、明治43年10月9日、10日の御園座での名古屋盲人会慈善演芸会の記事から知ることができる。名古屋盲人会の発展と図書館の建設を目的にしたこの会は、長唄、常磐津、小松検校社中の箏曲、三輪旭雲社中の筑前琵琶、二葉大夫の浄瑠璃、鈴木音楽会のヴァイオリン合奏、小松検校の胡弓と鈴木音楽社中のピアノとの合奏、愛絃会の絃楽合奏などの音曲のほか、剣舞、落語、手品、芸妓連による舞踊も加わり盛りだくさんの内容である。「久し振りの大演芸會とて入會者も續々あれば定めて盛況を呈すべし」[10月7日]という言葉どおり聴衆は多かったようで、決算報告によると、収入698円35銭、支出366円17銭、純益362円18銭。明治40年3月1日のマーケンスとハントの演奏会よりも高い収入と純益をあげている。

5. 明治44年、45年

(1) 明治44年4月29日のカペルマンの演奏会 愛知県会議事堂 [明治44年4月27日、28日、29日]

4月22日から24日のアメリカの飛行家マースの飛行大会が大きな話題を呼んでからわずか数日後の4月29日、ヴァイオリンのカペルマンの演奏会が行われている。ピアノ伴奏を夫人が務め、東京音楽学校を卒業したばかりの清水金太郎（後に浅草オペラで活躍）も出演する演奏会で、特等席は1円50銭、1等席は1円、2等席は50銭。ピアノは愛知県立高等女学校のピアノを借りた¹⁷。

『音楽界』第4巻第6号によると、曲目はピアノ独奏によるバッハのオルガン協奏曲、リストの練習曲、ヴェルディの《リゴレット》からの抜萃、チャイコフスキーの《エフゲニー・オネーギン》からの抜萃、ヴァイオリン独奏によるヴィニャフスキーのマズルカ、フーバイのハンガリー舞曲、独唱によるシューベルトの《魔王》などである。

(2) 演芸会

a. 明治44年5月3日、4日の慈善演芸会 御園座 [明治44年5月3日]

愛知育児院婦人部の主催。喜劇勸進帳、曲芸、小松検校社中の箏曲と三曲、岡本たき社中の長唄、安田孤雲の薩摩琵琶、西川石松社中の舞踏とともに、藤井音楽会員による「歐洲管絃樂序樂新紀元」「歐洲管絃樂舞樂ドナウ河の清流」が演奏されている。

b. 明治45年6月9日、10日の慈善演芸会 御園座 [明治45年6月5日、8日、9日]

名古屋盲人会の主催。落語、曲芸、喜劇、剣舞、八雲琴、浄瑠璃、長唄、安田孤雲の薩摩琵琶、内田紫山の尺八、小松検校社中の箏曲、浅井秋水のハーモニカ、藤井音楽会員の西洋音楽、芝笛、舞踏などを揃え、その道の大家が出演するのでなかなかの前評判だったという。

(3) 余興としての洋楽

不特定多数の人々を対象とする点で式や行事の余興として奏される洋楽もまた重要である。

a. いたう呉服店少年音楽隊

明治43年3月に株式会社いたう呉服店（大正14年に松坂屋に改称）が開業し、翌年の明治44年3月、東京の三越少年音楽隊の成功に倣い、店の宣伝活動のため、海軍軍楽隊出身の沼泰三を楽長に迎えて吹奏楽による少年音楽隊が結成された。募集は3月上旬で練習は3月中旬に始められ [明治44年3月8日]、結成の翌月から活動は開始されている。

まず、4月1日から30日まで、第1回児童用品陳列会で活動写真、お伽手品、幻燈とともに奏楽を行い [明治44年3月29日、4月24日]、4月23日は築地におけるマースの飛行大会に登場し行進曲を演奏 [4月23日、24日]。11月3日と4日の菊花陳列会では新曲を披露し [11月3日]、12月1日から3日までの女子芸芸品展覧会ではヴァイオリンとピアノの合奏をしている [11月27日]。

翌年の明治45年、4月15日から3週間、第2回こども博覧会¹⁸で「歐米に於ける著名音楽大家の新曲吹奏」をし [明治45年4月14日]、4月24日の少女世界愛読書大会で《君が代》を演奏 [明治45年4月24日]。7月13、14日には名古屋港でのアトウォーターの海上飛行大会に派遣されている [明治45年7月12日]

b. 祝賀会、講演会での余興

大正時代に洋楽演奏会の会場としてしばしば使われることになる愛知県商品陳列館は、明治43年3月に愛知県博物館から改称され、翌年1月に開館した。その創立第1回記念祝賀会が明治45年3月1日に同館で開かれ、館長や深野知事、出品人総代、各地からの祝辞に続いて多彩な顔ぶれによる余興の音楽が祝いの雰囲気盛り上げている。「…式を終りて餘興に移りいたう呉服店少年音楽隊（祝の曲）藤井音楽会員のヴァイオリン、セロ、ピオラ合奏（軍艦行進の曲、優雅の花）森田氏の薩摩琵琶（那須與一扇的）杉山、鬼頭兩嬢の琴、尺八合奏（千鳥）鈴木、森田兩氏の鈴琴、マンドリン合奏（越後獅子）井上、野村兩氏の狂言（入間川、歌争ひ）等あり」 [明治45年3月2日]。

「鈴琴」は明治44年に鈴木政吉が考案した三味線とギターを結び付けたような撥弦楽器で [明治44年8月18日、20日、21日]、この時も政吉自身が鈴琴を演奏したのかもしれない。

祝賀会の翌日の3月2日、名古屋基督教青年会の発起に際して第1回青年実業家修養会が中央教会で開かれ、鈴木ヴァイオリン工場の有志によるヴァイオリン合奏が演奏されている [明治45年3月2日]。また、5百人の聴衆が集った6月8日の名古屋市会議事堂での清話会の講演会では、鈴木ヴァイ

オリン店諸氏によるヴァイオリン合奏が開会の辞の後に行われている [明治 45 年 6 月 10 日]。

c. 活動写真の余興

名古屋において活動写真は明治 30 年に始まり、明治 40 年代には常設館が設けられ高い人気を得ていた (『新修名古屋市史』第六巻: 78-80)。さまざまな興行があったが、御園座の前田好洋一派の興行では、ストリング合奏の長唄《越後獅子》《吾妻八景》《勤進帳》が休憩時間に演奏されていた [明治 44 年 8 月 5 日、明治 45 年 4 月 9 日、11 日、15 日]。

(4) 明治 45 年 7 月 24 日の洋楽演奏会 商品陳列館 [明治 45 年 7 月 21 日]

清話会の主催により、7 月 24 日に東京音楽学校の卒業生を招いて洋楽演奏会が開かれることが予告されている。しかし、その後関連記事は見られず、演奏会の内容は不明である。明治天皇の容態が悪化し、歌舞音曲が自粛される中、演奏会は取りやめになったのではないかと考えられる。

(5) 浪花節の流行

明治 39 年の桃中軒雲右衛門の登場、明治 41 年の吉田奈良丸や京山小圓の上京によって聴衆層を拡大させ台頭してきた浪花節は (堀内 1942: 252-253)、名古屋では明治 44 年頃から著しい流行を見せている。「浪花節の流行 奈良丸一度縣地に入りてより各地とも浪花節の流行となれるが當地にては中流以上の人士が頻りに“頃は元祿”をうなりて研究會を開き居れり」 [明治 45 年 2 月 21 日]、「浪花節が世の中を風靡して居る事は可驚もので、新榮署の管轄内にある劇場十一個の内、音羽座の新演劇と、富本席の落語を除くと、他は全部浪花節と活動寫眞である」 [明治 45 年 5 月 17 日]。

また、電話で申し込むと人力車で駆け付けてきて蓄音器¹⁹を 1 時間貸し出す商売が現れ、雲右衛門、小圓、奈良丸の浪花節や豊竹呂昇の義太夫のレコードを聴かせていた [明治 45 年 6 月 8 日]。浪花節のほかには謡曲や浄瑠璃も「昨今専ら紳士間に」流行し [明治 44 年 9 月 5 日]、さらに、能楽研究や能の観覧を目的とする〈名古屋能楽会〉 [明治 44 年 2 月 6 日]、安田孤雲を会長とする薩摩琵琶の研究會〈愛琵琶〉 [明治 44 年 2 月 16 日] が組織され、軍人や学生、一般を対象にした薩摩琵琶の教授 [明治 44 年 5 月 23 日] や筑前琵琶の三輪旭雲による月 10 日間ほどの出張教授 [明治 45 年 5 月 22 日] が行われるなど、邦楽、俗楽の人気と活発な営みが明治末の名古屋の音楽文化の中心を成していた。そのような中での洋楽の普及である。

6. 終わりに

都市化が進む明治 40 年代、名古屋では邦楽や俗楽の興隆のかたわら、外来音楽家や東京の音楽家の洋楽演奏会、和洋混合の演奏会、共進会の奏楽堂での演奏会、演芸会や催し物での奏楽など、公の場での洋楽演奏がさまざまな形で行われていた。共進会閉会后、週に 1 回西洋音楽が演奏されるはずだった奏楽堂は使われず「立派な音楽堂は雨と風とでボロボロになつて仕舞って居る」 [明治 45 年 7 月 20 日] という有様だったように、洋楽文化形成の道のりは直線的なものではなかったが、まだなじみのない洋楽に聴き手として、演奏者として、後援、協力者として関わる名古屋の人々の熱気や活気を新聞のそれぞれの記事から感じ取ることができる。

大正時代に入ると、明治 44 年に結成されたいとう呉服店少年音楽隊や大正元年に結成された名古屋

第三師団軍楽隊が活躍し、鶴舞公園奏楽堂での演奏が活発に展開される上、国内外の音楽家の演奏会も増え洋楽への意識は高まっていく。そのような動きを間近に控えた明治 40 年代の名古屋の洋楽受容の実状が、『名古屋新聞』の精査によって浮き彫りにされるのである。

注

- ¹ 近年、本学の井上さつき教授の「鈴木政吉研究」（愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要『MIXED MUSES』no.5～no.7、2010～2012年）や「恒川鏝之助と明治期日本の音楽」（『愛知県立芸術大学紀要』No.41、2011年）、井上教授を代表とする〈鈴木政吉プロジェクト〉の活動によって名古屋の洋楽受容研究の本格的な取り組みが始まっている。
- ² 『名古屋新聞』の記事収集にあたっては、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵の『名古屋新聞縮刷版オンデマンド版』（双光エシックス、2011年）を使用した。
- ³ 御園座は明治 30 年に開館した。客席は畳敷の拵席で、定員は 1 階 964 人、2 階 252 人の計 1216 人である。5 月 15 日の落成式では、金城軍楽隊が《君が代》を演奏した（藤野：7-8）。
- ⁴ この演奏会について詳細は記されていない。『新愛知』や『扶桑新聞』『扶桑新報』を前身に明治 20 年に創刊にも記事は見られない。
- ⁵ 明治 40 年 2 月 24 日、2 月 26 日付の『新愛知』によると、マーケンスはユトレヒトに生まれ、ハーグ音楽院の出身。低音独唱のスミスは名古屋市在住である。
- ⁶ 明治 39 年 9 月 6 日、愛知育児院と名古屋盲啞学校のための慈善音楽会として御園座で催されたもので、宮内省式部職の楽師十数名と同省の外国人教師が出演した（藤野：52）。
- ⁷ 安田俊高は先述の名古屋音楽講習会の会員の一人でもある。安田は明治 6 年に生まれ、明治 29 年に東京音楽学校本科師範部を卒業。愛知県第一師範学校、名古屋幼年学校に奉職している（『音楽年鑑昭和 10 年版』：139-140）。
- ⁸ 3 月 2 日の京都での演奏会は京都市会議事堂で催されているが、その時も拍手の音が演奏を妨げるという聴衆の無作法があったという（『音楽世界』第 1 巻第 3 号）。
- ⁹ 明治から大正にかけての洋楽界には、洋楽をそのまま享受する「直輸入派」と西洋と日本の要素を混合する「和洋折衷派」の 2 つが存在したと言われ、北村季晴は後者の代表である（奥中 2006：16-17）。
- ¹⁰ この共進会で、鈴木政吉が出品したヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが皇太子殿下御買上の榮譽に浴し、ヴィオラは一等賞（金牌）を受賞している [明治 43 年 6 月 6 日]。
- ¹¹ 「奏楽堂 十九坪 開府祈念三百年會の經營に成り様式はアイオニック式八角形を為し屋根は圓形の銅葺にて兜形を為す、是亦將來公園の一景となるべきもの」（『新愛知』明治 43 年 3 月 16 日）。
- ¹² 明治 43 年 3 月 21 日付の『新愛知』第 1 面に奏楽堂での演奏風景の写真が載せられているが、人物を識別することはほとんどできない。
- ¹³ 《名古屋祈念行進曲》の後半には明治 43 年 2 月に制定された「名古屋市歌」（上田萬年作詞、岡野貞一作曲）が用いられているようである。「望み多き我市の愈よ發展し行く有様を叙し、後段に至りて名古屋市歌に移り最も熱誠なる市民の歡喜を遺憾なく紹介」（『扶桑新聞』明治 43 年 5 月 21 日）。

- ¹⁴ 東京音楽学校研究科生ならびに第3年生50名が修学旅行として関西に来遊するのを機に、京都、奈良、神戸で演奏会が催されている（『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』：9）。
- ¹⁵ 杉山長谷夫（1889～1925）は名古屋出身の音楽家で、東京音楽学校卒業後ヴァイオリン奏者として活動し、室内楽にも積極的に関わっている。名古屋の演奏会にも時々出演し、大正15年4月11日には中区新栄に竣工したばかりの教会会館で邦人作品を取り上げたヴァイオリン独奏会を開き、「邦楽壇最初の試み」「日本の提琴界の発達を知るバロメーター」と話題を呼んでいる（『新愛知』大正15年4月11日）。
- ¹⁶ 『新愛知』や『音楽世界』第4巻第5号でも演奏会の予告しかされていない。
- ¹⁷ 愛知県立高等女学校（大正4年より愛知県立第一高等女学校）には明治43年に和楽会から寄付されたピアノがあった（『新愛知』大正13年6月25日）。
- ¹⁸ この博覧会では出品物の審査、賞の贈与がされており、鈴木政吉の児童用ヴァイオリンが名誉賞を受賞している〔明治45年4月26日〕。
- ¹⁹ 日本で平円盤蓄音器が普及したのは日露戦争後のことで、明治43年に創立された日本蓄音器商会は浪花節のレコードを売り出して成功した（堀内1942：318、321）。『名古屋新聞』では、東京の三光堂、名古屋市西区玉屋町の後藤時計店や長谷川時計舗、中区末広町の日本蓄音器商会名古屋出張所等の蓄音器の広告が載せられ、時々新譜の紹介（義太夫、長唄、端唄、楽隊、浪花節、薩摩琵琶、筑前琵琶、尺八、唱歌、新内）もされている。

引用文献

- 『名古屋新聞』（『名古屋新聞縮刷版オンデマンド版』双光エシックス、2011年）
- 『新愛知』
- 『扶桑新聞』
- 『音楽雑誌』（音楽雑誌社、1-58号、共益商社書店、59-60号）：復刻版（出版科学研究所、1984年）
- 『音楽世界』（京都：十字屋田中商店楽器部）
- 『音楽界』（楽界社、第1巻第1号～第6巻第12号、147号～266号）：復刻版（大空社、1995年）
- 「音楽年鑑昭和10年版」『近代音楽年鑑』（松下鈞監修、大空社、1995年）
- 『三府廿八県第十回関西府県聯合共進会場平面俯瞰全図』（名古屋、星野文星堂、1910年3月；名古屋郷土文化会事務局、2005年）
- 『総合名古屋市年表（明治編）』（名古屋市会事務局、1961年）
- 「名古屋市の成立と発展」「明治期名古屋の文化」『新修名古屋市史』第五巻（名古屋市、2000年）
- 「近代都市名古屋へ」『新修名古屋市史』第六巻（名古屋市、2000年）
- 『新修名古屋市史』第十巻、年表・索引（名古屋市、2001年）
- 『名古屋新聞社史』（名古屋新聞社、1936）
- 堀内敬三『音楽五十年史』（鱒書房、1942年）
- 藤野義夫『御園座七十年史』（御園座、1966年）
- 『日本の洋楽百年史』秋山龍英編著（第一法規出版、1966年）
- 『東京芸術大学百年史音楽学校篇』第二巻（音楽之友社、2003年）
- 津上智実、橋本久美子、大角欣矢『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』（東京芸術大学出版会、2011年）
- 塩津洋子「明治期関西の民間音楽隊—洋楽普及に果たした役割—」『音楽研究』大阪音楽大学音楽研究所年報第11巻（1993年）、25-51。
- 奥中康人「和洋折衷の明治音楽史—伊澤修二・北村季晴・初期宝塚—」『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』津金澤聰廣、近藤久美編著（世界思想社、2006年）、16-26。
- 小沢優子「音楽雑誌に見る明治、大正期の名古屋の洋楽受容」『名古屋音楽大学研究紀要』第30号（2011年）、17-31。